

旅のメキシコ

樋浦明夫*

1996年11月と97年10月に、アメリカ神経科学会の帰途、メキシコに立ち寄った。1回目はワシントン D.C から、2回目はニューオリンズからメキシコ市に向かった。各々わずか1週間程度なので、かい間見てきたメキシコを紹介したい。

[1] ベラクルスとその周辺

ベラクルス Vera・cruz (真の十字架) は中部メキシコのメキシコ湾に面し、メキシコ市から飛行機で約40分かかる(現地の人々の発音はベラクルと聞こえる)。ベラクルスはスペイン人の征服者コルテス Cortés によりメキシコに最初に作られた植民都市(1519年)で、スペイン人によるアステカ王国 Reino de Azteca の首都テノチティラン(後のメキシコ市)への進撃の拠点となったところとして名高い。11月も末のワシントンはオーバーコートを着込む程寒かったのにベラクルスの連日の夏のような暑さには驚いた。ベラクルスにはメキシコ市のような高い建物はなく、落ち着いた感じの港街だった。海の近くの Mocambo Hotel から眺めた広漠として穏やかなコバルトブルーの海面を見た時の解放感は忘れられない憶い出の一つ。メキシコの友人、精神科医のロペス Dra. López と小児歯科医のアルバラード Dra. Alvarad の両人とホテルで再会する。彼等の共同の診療所へ案内してもらう。共通の受付嬢(南米系美人のアニータ Anita)がいる他は、看護婦、衛生師はいなかった。ロペスが心理学を教えている大学の教え子が何人か彼女の診療を手伝っている(勉強している?)ようだった。ロペスは夕方からその私立ヴィヤ・リカ大学 Universidad Autonoma Villa Rica の講義に出かけた。このようにメキシコでは医者とはいえ生活をしていくのはなかなか大変で、何がしか副業を持っているという話を聞いた。後で彼女の大学に案内してもらったが、講義は朝7時から夜の10時迄だそうで夜の7時頃に行っても学生が大勢教室や校庭にたむろしていた。また校舎には大きな壁画がありメキシコらしいと思った。ホテルにもどったら夜から

* 徳島大学歯学部



図1. 今回旅したメキシコ各地の位置。

翌日の午前中位まで強い風が吹き眠れなかった。後で聞いたらこれはノルテ Norte (強い風) といってベラクルス名物の一つとのことだった。翌朝9時半に兩人とベラクルス州都のハラッパ Zarappa にロペスの車で出かけた。ベラクルスから北西へ3時間程で、丘の上にある坂の多い古都という感じの町だった。ベラクルス大学の国立人類学博物館 Nationale Anthropologia Museum を見学した。古い人骨で前頭部が垂直でなく、前頭から頭頂にかけて傾斜している頭蓋が多く陳列されていた(写真1)。おそらく赤ん坊の時に頭を板や布などで圧迫することにより、人為的に頭の形を変える頭蓋変形の風習を持っていたのであろう。博物館の中庭にはメキシコ最古のオルメカ文明(紀元前1200年頃)の象徴である「巨石人頭」(写真2)が展示されている。翌日、再び3人で朝6時のバスに乗り、5時間かけパパントラ Papantla に出かけた。ベラクルス、パパントラ間は道路に沿って所々に広い牧場があり、牛がのんびり草をはんでいた。馬やロバに乗ったソンプレロをかぶった人を時々見かけることができ

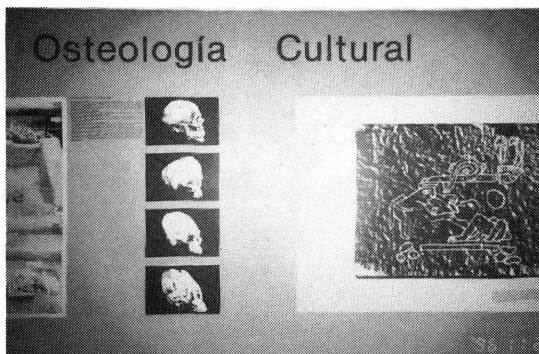


写真1

た。行きも帰りもバスは満員で、途中二人の若い男性の一人がギターを弾き、他の一人が歌い始めた。そうやって乗客からいくらかのお金を稼いでいるようだった（乗客から2ペソ位ずつもらうとのこと、当時1ペソは約15円）。パパントラから15K 北西に位置し、紀元600～700年頃に建築されたピラミッドを有するメキシコ湾岸で最も重要な遺跡を持つタヒン Tajin という街のピラミッド（写真3）を見物した。このピラミッドはレンガ状の石を積み重ねたもので頂上は平らになっている。ロペスが大学生の甥から借りてくれた半ズボンとTシャツに着替えての見物だったが、日本の真夏のような暑さには閉口した。地元の観光客も手に持ったペットボトルの水を飲みながら見物していた。まさに太陽の国、太陽の民を実感した。

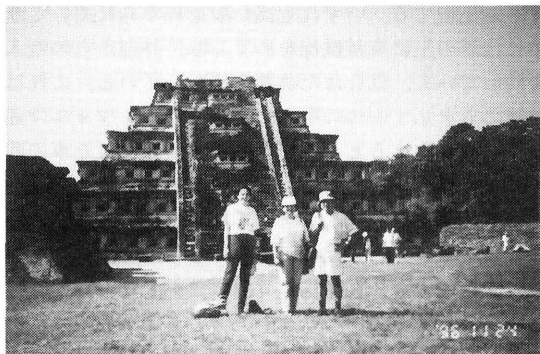


写真3

[2] メキシコ市

メキシコ市は人口2000万人を擁するメキシコの首都で、海拔2200Mの高地にある。14世紀にアステカ人がメキシコ中央高原のテスココ湖 Lago de Texcoco に浮かぶ小さな島に彼等の神（メシトリ=太陽と戦争の神）を奉る神殿を建てたことから始まる。ここが後に

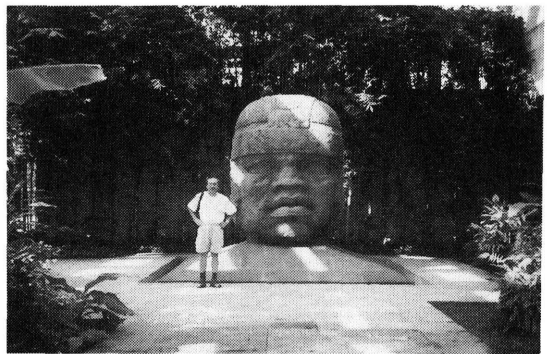


写真2

アステカ王国の首都メヒコ（メシトリの土地）=テノチティトラン（ザボテンの生える所）になり、湖を埋め立て次第に巨大な都市になった。スペイン人による征服（1521年）後はさらに湖は埋め立てられ、現在飛行機上からのぞいてもメキシコ市の周辺に湖らしいものはほとんど見られなく、街の周囲は赤茶けた砂漠のような感じがする。

メキシコ市でのホテルは革命記念塔 Monumento a la Revolución（写真4）の近くのレフォルマ通り Paseo de la Reforma に面したクラウンプラザで、ガイドブックによるとソカロ Zocalo（中央広場）周辺にある。ソカロはアステカの時代に大神殿が建てられて以来政治、宗教の中心地となった場所だ。とにかくメキシコの街にはやたらと記念碑（モニュメント）Monumento が多い。レフォルマ通りを南西方向に行くと、道路の中央にコロンブス記念塔 Monumento a Columbus が建っている。さらに行くとアステカ王国最後の王クアウテモクの記念塔 Monumento a Cuauhtemoc、独立記念塔 Monumento a la Independencia（写真5）があり、日本大使館を経て広大なチャプルテペック公園 Bosque de Chapultepec に至る。ここには人類学博物館、近代美術館、動物園などがある。ちょうど上野公園のようだが、公園の中をレフォルマ通りが貫通し、車で混雑している所が違っている。メキシコの人達はなぜ歴史的なモニュメントを作りたがるのだろうか。1521年にアステカ王国が滅び、スペインの植民地になってから約300年もの間インディオ Indio とスペイン人とインディオの混血であるメスティーソ Mestizo はスペイン人による差別と圧政の下に富と栄誉を奪われ、塗炭の苦しみを味わわれたことと無関係ではないであろう。スペインからの独立の動きは神父イグルゴ Hidalgo やモローレスによって1810年に始まった。曲折を経て1821年に独立を達成し

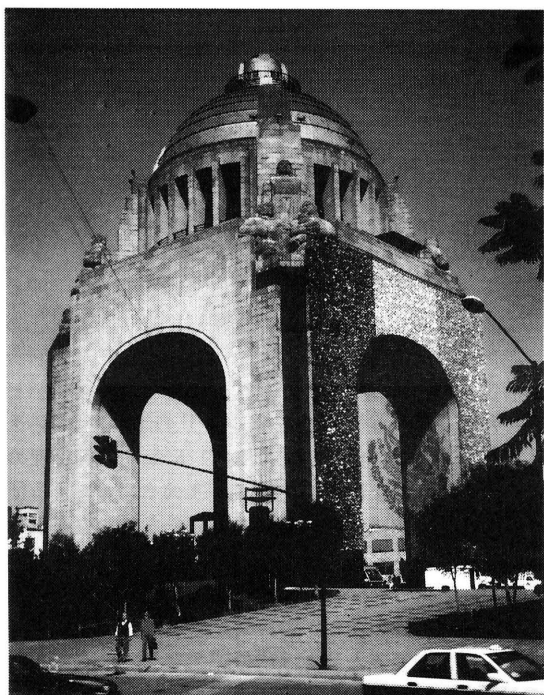


写真4

た。その後、アメリカの侵略（1847年アメリカ軍はベラクルスに上陸し、スペイン人と同じように首都に向け進撃した。ちなみにこの頃日本では1998年のNHK大河ドラマ「徳川慶喜」に描かれたように、黒船の来航に始まる幕末から明治維新の激動期を迎える。今回、メキシコの歴史をひもといてみて、現在のアメリカのカリフォルニア、ニューメキシコ、アリゾナ、テキサスなど、本来メキシコの半分に相当する広大な領土がアメリカに略奪された経緯を知った。メキシコ人の反米感情も分かるというもの。それでもメキシコの国土は日本の5.2倍の広さという。）や内乱（改革戦争）を経て、1860年に初めてインディオの大統領ベニート・ファレス Benito Juárez の改革派（自由主義）が勝利し、メキシコの貧困からの解放（改革＝レフォルマ）をかかげた。レフォルマ通りはこれに由来している。ディアス Diaz が1876年から1911年まで独裁政治を行ない、貧富の差はかつてなく拡大した。これが原因で独裁政治を倒し、労働者の権利の確立や土地を農民へというスローガンの下にメキシコ革命の時代（1910～1917）に入る。これに参画したマデロ Madero、ピリア、カランサ、サパタ Zapata など革命の英雄が革命記念塔に眠っているという。こうしてみると沢山のモニュメントは理想を実現しようとした同胞の血

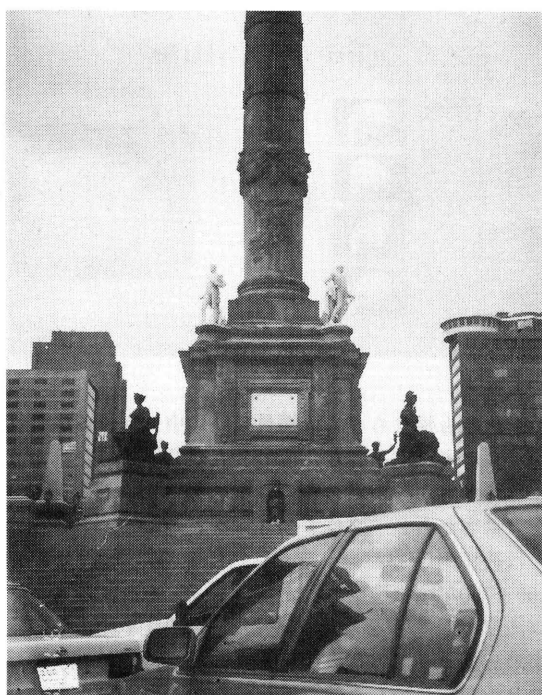


写真5

をあがなうためのものかも知れない。メシトリの民の象徴でもあるのであろう。ともあれメキシコにおける貧困の問題はまだ解決していないようだ。チャプルテペック公園を西に外れる頃には道路の両脇に豪邸がたくさん出現する。いずれも高い塀をめぐらせていたり、中には塀の上には有棘鉄線をめぐらし、外部からの侵入を防いでいて、はなはだ美観を損なっている。これは貧富の差を示す一つの現われと言える。レフォルマ通りでは車が止まると子供が新聞、宝くじなどを車の間をぬって売り歩いている。また止まっている車の横で兄弟で曲芸まがいのことをして稼いでいたりする。見るところこれらの人達は白人ではない。

メキシコでは1920年代に「壁画運動」が起り、働きずめで見ることができない人々でも鑑賞することができるムラール（壁画）Mural でメキシコ革命を表現しようとした。その一人ディエゴ・リベラ Diego Rivera（1886～1957）の壁画（写真6）をアラメダ公園 Alameda Central の一角にあるディエゴ・リベラ壁画美術館で見物した。絵の左端にコルテス（侵略者ゆえか消え入りそうに小さく描かれている）が、その少し右上に大きくファレス、真ん中少し右上に独裁者ディアス、右端近く上にマデロなどが描かれ、スペイン人による征服から独立、革命までのメキシコ社会の変化



DIEGO RIVERA

写真6

を知ることができる。なおこの美術館の入口には、10月はちょうど日本のお盆にあたる時期だそうで、死者をかたどった骸骨の人形(写真7)が飾られていた。その前には日本と同じように色とりどりのお供え物があった(食べ物などの)。この女性の人形はLa Calavera Catrinaといい、リベラの壁画の中央にも描かれている。リベラは彼女の肩にトウモロコシの栽培を人間に教えたとされているメキシコの古い神、ケツアルコアトル Quetzalcóatl(羽毛のはえたへビ)をからませている。

[3] トルーカ山 Nevado de Toluca

トルーカ山はメキシコ市の西方約80kに位置し、メキシコ第4の高峰である(4600~4700m)。今回のメキシコ市滞在の目的はこのトルーカ山に登ることだった。メキシコまで来て、ベラクルスに来ないととは不評だったが、メキシコ市滞在中にアルバラードが面会に来てくれて、メキシコ市内を案内してくれた。出発する前にアルパインツアー社にトルーカ山の情報を求めたところ、万年雪もなく比較的容易に登れる山(北峰)ということだった。10月29日(1997年)にメキシコ市に着き、ホテルのフロントにトルーカ山に登りたい旨を告げ、ガイドを紹介してもらった。31日の朝9時にホテルを車で出発することとなった。翌30日は市内見物などをして過す(喉が渴いたので露店の生オレンジジュースを飲んだら、一晩中下痢で悩まされた、要注意!)。さて翌朝やって来たガイドは山に親しんでいる風には見えないので、「山に登れるのか?」と聞いたところ、妙な顔をしている。ここで言い合っても仕方ないので、とにかく彼の車で出発することにした。不安なので、サミット(頂上)まで行きたいのだが、現地でガイドをやとえるか聞いたら、ガイドはいるという

ので、半信半疑ながら、登り口まで行けば何とかなるだろうと肚をすえる。途中、未舗装のデコボコの山道を揺られながら、約2時間で噴火口の南西斜面の外輪部(おそらく標高4200~4300m位)の終点に着いた。案内の定ガイドはいなかった。自分も一緒に登ろうかとガイド氏は言ってくれたが、いいからと車を待たして、11時20分に噴火口を目指して歩き始める。一気に車で4000mまで来たので、高山病を心配したが、きついかれど何とか休み休み噴火口を鳥瞰できる外輪の縁まで登った。途中、登山道の斜面は無数の竜舌蘭 Pita におおわれていた(写真8)。霧がかかって頂上らしきものは見えず、どれが北峰か南峰かさっぱり分からない。噴火口に下りると、二人連れの若者が運転する車が見えたので(ここまで車で来ることが出来る 写真9)、近づいて頂上を聞くがさっぱり要領を得ない。天気も良くないし、頂上は危ないから登らないほうがいいと忠告してくれたが、トライしてみると言って再び元の外輪の縁まで登る。霧の晴れ間にピークらしきものが見えたので、岩にしるされた矢印に従い、縁に沿って登り始めた。2時間位かかって北峰と思ったピークの



写真7

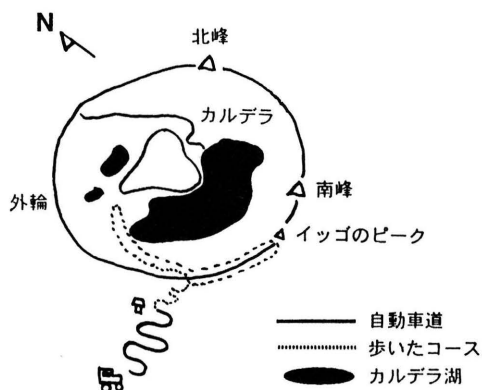


図2. トルーカ山概念図。

「地球の歩き方(メキシコ)」(ダイヤモンド社)にはネバード・デ・トルーカはメキシコ第4番の高さを誇る万年雪の山と説明されているが、10月末なのに(富士山ではもう雪が積もっている)雪はなかった。下山する頃にほんの少し、霰か雪みたいなものが散らつた。

手前のピークまで登る(このピークは砂礫におおわれ、足場が悪く、四つんばいになって登った)。ピークに立って見ると北峰(?)との間は深く切れ込み、その壁は急峻で、手に負えそうもないので、そこから引き返した。車のところにもどったのが3時30分頃だった。そこに陸上の強化練習をやっている若者が数人いたので、再びピークを聞いたら、これも良く分からない。今登ってきたピークを指したら、あれはイッゴのピークと

教えてくれた。というわけで、後で考えたところ、どうも北峰と南峰を間違えたらしいことが分かった(北峰、南峰と言うが、外輪の両極に位置しているわけではない)。写真9のピークが北峰で、それに続く写真10のピークが南峰だと思う。南峰の手前に見える白い砂礫質のピークがイッゴのピークである。メキシコ市にもどってから地図を探したがなかなか見つからず確認しようもないが、車でトルーカ山の南西斜面を登らず、



写真8

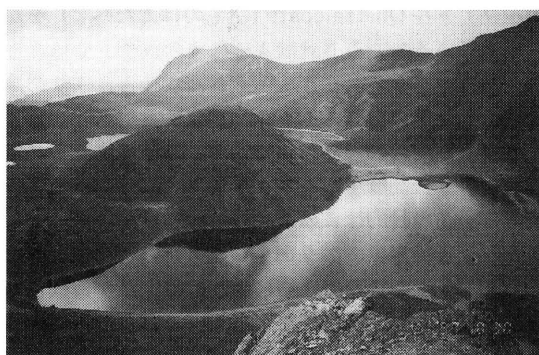


写真9

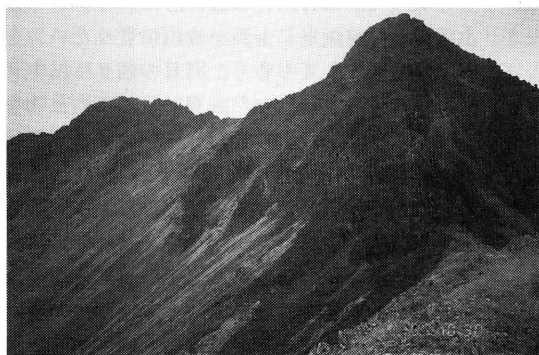


写真10

直接噴火口(4200m)に行っていれば、あるいは北峰と南峰を間違わずに済んだかもしれない。それとメキシコでトルーカ山に登るというのは噴火口まで車で行くことであるらしい。それにしても、どこの国の山も日本と同じように標識、その他整備されていると勝手に思うのはとんだ間違いで、つまらないことでとんだ失敗をすることもあるというお粗末な山行だった。

写真と説明

1. ベラクルス大学人類学博物館の古いメキシコ人の頭蓋説明図。

4個の頭蓋のうち、より古いと思われる下の2つは極端に頭蓋が変形しているのが分る。何らかの風習によるものであろう。ちょうど中国で行われた纏足のように。

2. オルメカ文明の象徴「巨石人頭」。

ふっくらした頬、厚いへの字の唇、低くて広い鼻が特徴

3. タヒンのピラミッドの前でメキシコの友人と。

このピラミッドの高さは25mで、各基壇上に一年の数(365)に相当する窓のような窪みがついているので壁龕(へきがん)のピラミッドという。

4. 革命記念塔

4本の柱の頂上四隅にインディオが誇り高く彫像してある。

5. レフォルマ通りのロータリーにある独立記念塔。

車の中から撮ったので頂上にある金のエンゼル像は写っていない。

6. 「Sueño de una Torde Dominical en la Alameda Central アルメダ公園でのある日曜の午後の夢」と題するディエゴ・リベラのフレスコ画(4.75×15.67m, 1947年作)。

当初プラドホテル Hotel de Plado のロビーに飾られていたが、1985年のメキシコ大地震の後に現在地に移された。

7. 女性の骸骨像 La Calavera Catrina,

これの創作者であるホセ・グアダルーペ・ポサダ José Guadalupe Posada がリベラの壁画の中央に Catrina の右隣の紳士として描かれている。Catrina の左の少年はリベラの自画像。

8. トルーカ山の外輪山斜面に生えていた竜舌蘭。

この樹液を蒸留して作ったのがテキーラ Tequila である。ロベスの友人ホセ氏 Dr. José のアパートで、彼手作りの料理をご馳走になりながら、まずテキーラをひと口飲み、次にトマトジュースをひと口、塩をなめて、最後にレモンの半切を吸うのがテキーラの飲み方だと教わったのも楽しい憶い出の一つ。

9. トルーカ山のカルデラ湖の眺望。

自動車道が見え、ここまで車で登ることができる。湖の近くに岩のように大きな動かないものがいると思ったら放牧している牛だった。右端のピークが北峰であろう。

10. イグゴのピークより見たトルーカ山南峰の頂。

急峻な屋根の途中に十字架が見える。恐れをなしてここから引き返した。